

これからの世界を生きる上で、思い込みや偏見を思考力で克服できる能力が必要であると考えている。では、思考力はどのように伸ばせるのだろうか。

「思考力・判断力・表現力を伸ばす学習法」として、TOK(Theory of Knowledge・知の理論)やCILT(Content and Communication Integrated Learning・内容言語統合型学習)が注目されている。TOKもCILTも学習者の「思

## 「思考力」どう伸ばす

系的に培う学習法である。IB認定を受けている学校は、今年3月現在、世界153以上の国・地域において約5千校ある。IBでは実社会の状況に即した豊富な課題をもとに思考を深めることが重視される。

CILTはヨーロッパの複言語主義を体现する外国語学習法と言われ、内容(Content)・言語(Language)・認知力(Cognition)・異文化力(Cognition)・異文化理解(Inter-cultural Understanding)・国際理解(Inter-cultural Understanding)・協学・学習共同体(Culture/Community)の4つのCを骨子としており、これら4つの構成要素を有機的に結びつけて行うものである。教員がどう教えるのかという

世紀型能力」の育成が求められるようになった。21世紀型能力とは、知識や技術等の基礎力、自ら問題を解いていく思考力、得た知識や技術を活用した実践力のことである。このような視点で言語教育の在り方にも大きく影響してきている。

私はTOKの中でも「土着の知識」つまり、自分の「常識」が狭い範囲の中で培われたものであり、それらの影響を受けていることを自覚できるような学習法を、異文化理解や多様性理解のヒントがあると考えている。私自身の取り組みとしては、TOKとCILTの両方を意識し、主に留学生を対象にした「日本語」教育や、日本人学生と留学生両方を対象にした初年次教育などに取り入れている。

## これからを

## 生きるために

考」活動を促進させることを重視している。

TOKはIB(国際バカロレア)のディプロマプログラムにおいて中核となる学習の1つで、Critical Thinking(批判的思考)を体



名古屋経済大学経営学部准教授

宮島 良子

「教授法」ではなく、学習者がどう学ぶのかというところに焦点が当たっており、アクティブラーニングとも相性がよく、日本の英語教育や日本語教育においても取り入れられ始めている。

さて、これまで外国人と直接コミュニケーションを取る機会が少ない日本においては、言語学習の多くは教養として知識を得るだけという面が強く続いてきたと考える。しかしながら近年、社会が急激に変化するなかで、知識偏重から思考力重視へと、いわゆる「21

ところで、この数年は日本人が海外へ行く機会が増えただけでなく、インバウンドも活発化し、外国人労働者の受け入れ拡大に加え、インターネットの普及も後押しし、国内外で外国人と直接コミュニケーションを取る機会は格段に増えた。在住外国人の増加に対して、多くの懸念材料が指摘されているが、思い込みや偏見による思考停止によって最悪の結果につながりかねない。これからの安全に安心に生きるために、私たち一人一人が何ができるかを考え続け、行動することが必要であり、そのための思考力を育てていかなければならない。

みやじま・りょうこ 日本語  
教育学。名古屋大学大学院博士  
課程後期課程中途退学。197  
4年生まれ。

